

潮来市の誇れる自然

第83回

公開シンポジウム「霞ヶ浦流域研究2024」が大盛況！

暖冬の今年はコウバイやスイセンの開花が早く、北浦で越冬したカマキリが渡り始めるのも早かったようです。まだ水は冷たいですが、学生たちの魚類調査もはじまっています（写真1）。もう少しあたたかくなると、霞ヶ浦流域での水環境や水生生物（写真2）のフィールド調査が本格化します。

本格的な調査が始まる前の3月3日に、公開シンポジウム「霞ヶ浦流域研究2024」が、茨城大学水圏環境フィールドステーション（潮来市大生）の主催でオンライン開催されました。霞ヶ浦流域などで調査・研究を行う高校生・大学生、県の自然博物館や水産試験場、霞ヶ浦環境科学センターの研究者、市民などが集まって、それぞれの最新の成果を報告しました。今年は口頭発表16件、ポスター発表8件で、県内外から約1000名の参加がありました。

今回も発表内容は多岐にわたりました。例えば、霞ヶ浦・北浦の水環境や微生物群集、



(写真1) 学生たちの魚類調査



(写真2) 婚姻色がきれいなオイカワ

植物プランクトン、外来植物オオバナムズギンバイ、ユスリカ類幼虫の変遷と貧酸素水塊の関係、ワカサギ資源の動向、消波施設がヨシ帯の魚類群集にもたらす影響など、フィールド調査の結果が発表されました。また、周辺地域での事例として、外来魚チャネルキャットフィッシュが利根川河口域にも侵入し外来種を捕食している実態や茨城県での特定外来生物キョウの確認状況、福島県の帰還困難区域での放射性物質の挙動などの報告もあり、議論も盛り上がりました。

今後とも、霞ヶ浦流域の生徒・学生・研究者・市民のつながりを大切にしながら、調査・研究を続けていきたいと思えます。引き続き、ご理解とご協力のほどをお願いいたします。

茨城大学地球・地域環境共創機構水圏環境フィールドステーション

金子 誠也・加納 光樹

潮来市の誇れる文化

第143回

国神社の沿革と祭礼

【鎮座地】潮来市上戸1551番地

この神社は、県指定無形民俗文化財・上戸の獅子舞の奉納される場所として、広く知られている。

神社の創立は、嘉暦元年（1328年・鎌倉時代）で、高村（現在の潮来市古高）の国上神社より遷宮したと伝えられているが、観応3年（1352年・南北朝時代）との説もある。祭神は、大己貴命（おおなむちのみこと）（大国主命）・少彦名命（すくなひこのみこと）である。

御神体は、元禄3年（1690年・江戸時代）水戸藩主徳川光圀により大洗磯前神社から神儀石3基が分霊されたと伝えられている。社殿は、本殿・幣殿・拝殿とも茅葺きであったが、戦後銅板に葺き替えられた。社は、明治6年（1873年）社寺改正法に際し、廃社となったが、明治10年に氏子達の熱心な復社請願により、明治14年村社として許可された経緯がある。

祭礼は、元禄3年光圀により、11月の仲の卯の日を新嘗祭（いなめさい）とし、獅子舞を奉納するように定められたと伝えられている。その後、獅子舞は太平洋戦争や戦後の混乱期を乗り越えて

潮来市文化財保護審議会

委員 明間 信夫



国神社